

甘 苦 上 海

IV

悲

から

艶

へ

gan ku
Shanghai

高樹のぶ子

高樹のぶ子

甘苦上海 IV

悲
から
艶

工业学院图书馆
藏书章

日本經濟新聞出版社

高樹のぶ子（たかぎ のぶこ）

1946年、山口県防府市生まれ。東京女子大学短期大学部卒。
80年「その細き道」を「文學界」に発表。84年「光抱く友よ」で芥川賞、95年『水脈』で女流文学賞、99年『透光の樹』で谷崎潤一郎賞、2006年『H O K K A I』で芸術選奨文部科学大臣賞を受賞。他に『時を青く染めて』『サザンスコール』『百年の預言』『ナポリ魔の風』『マイマイ新子』『せつないカモメたち』『彩月——季節の短篇』『fantasia』など著作多数。01年より芥川賞選考委員、05年より九州大学アジア総合政策センター特任教授（アジア現代文化研究部門）を務める。09年4月紫綬褒章受章。

甘苦上海IV

2009年11月2日 第1刷

著 者 高樹のぶ子
発 行 者 羽土力
発 行 所 日本経済新聞出版社
<http://www.nikkeibook.com/>
東京都千代田区大手町1-9-5
郵便番号 100-8066
電話 03-3270-0251
印刷・製本 凸版印刷

本書の無断複写複製（コピー）は特定の場合を除き、著作者・出版社の権利侵害になります。

目次

ロータス西湖

7

風の抱擁

66

アンフォゲッ
タブル

108

寧波啾啾

138

ブックデザイン／坂川栄治＋永井亜矢子（坂川事務所）
カバーイラスト／宿谷フミコ

甘
苦
上
海

IV

主な登場人物

早見紅子

五十二歳。独身。日本でエステチエーンを成功させ、四年前に単身上海へ。路面店五店舗を展開するが世界的な不況で支店撤収を余儀なくされる。年下の石井京との出逢いが人生に欠けていたものを氣付かせるが、その蒼い影に翻弄され、「二番目の男」が出現し……

石井京

三十九歳。独身、離婚歴有り。翻訳で生計をたてながら名門・復旦大学で書誌学の博士論文を書いている。女には身勝手に振る舞い、「信じられるのが怖い」。身に纏った蒼い影と複雑な屈折は、大阪での新聞記者時代に遭遇した事件の苦い記憶によるものだった。

松本

四十七歳。バイアグラとワルマツクを携行する単身赴任の日本の中堅商社支社長。「十九歳」の小姐・黄蓉との「恋愛故事」に破れ、いつの間にか紅子の「二番目の男」に。

黄蓉

二十八歳。出嫁ぎに来ていた外地人で、紅子の運転手・趙建国の姪。不遇の小姐で松本の「恋人」だったが、謎の猫「コン」を連れて故郷・安徽省に帰り、娘とふたりで暮らす。

不夜

古美術店をあずかる声を持たない謎のチベット人。行方知れずの春火を路上で発見。春火を追ってやってきた紅子が店の曼荼羅絵に魅せられ、交流が始まり、降魔術を施術する。

氏家

松本の大学の後輩。銀行員。大阪・中之島支店勤務。バブル崩壊後の中小企業の倒産に絡み、記者時代の京と接点があった。松本が紅子に紹介し、京の秘められた過去が明らかに。

周敏

二十四歳。独身。上海の裕福な家庭で育ち、日本の大学へ。卒業後は人気の小物ブランド「アナベル・リー」本店でマネージャーを務めていた才媛。京の「恋人」だったが……

春火

バーで出逢った紅子をクラブへ連れ出した、気ままな上海暮らしを楽しむ天使のような女の子。一時行方知れずとなるが、不夜があずかる古美術店で見つかり、再び失踪する。

コン

京が日本から連れてきた猫。「恋人」周敏が怖がり、紅子の家から松本の家へ、最後は黄蓉が故郷に連れて帰り、日食の日に死ぬ。その名前は京の心を苛む苦い過去につながっていた。

本文写真撮影／著者

ロータス西湖

PALLADIOの片隅のテーブル。土曜の午後、わたしは松本と会っている。外は三十五度を超しているかも知れない。熱気と湿気が白濁した陽光と一緒に、空から圧力をかけてくる。排気に覆われた上海の大気は、ビニールを被せられたように逃げ場がない。

松本を呼び出したのはわたしで、彼の部屋ではなくPALLADIOを指定したとき、なんやまた改まってからに、と言いながらも、わたしの心模様は察したようだ。

壁は白と茶の大理石と鏡、床はモザイクタイルと大判の大理石でデザインされたレストラン内は、外の景色が肉桂色（ちけい）の炎をあげて燃え上がっている。静かな空調のなかでしんと静まり返っている。

松本は珍しく真っ白い綿シャツに薄いグリーンのパンツ姿だ。焼き鳥屋のカウンターで飲んでるときより、目の周辺が冴さえ冴さえとして明るい。

昼間つからなんやけど、やっぱビールにしよ、と松本が言い出して、ビールになった。

「…そうか、コンは死んだんやな。けど出来すぎやな、日食の瞬間やて」

「黄蓉^{ホァンロン}さん、元気で働いてたよ、娘も」

「まあな、想像つくわ。けど、そんな話とちゃうんやろ。何やわからんけど、あったんやろ？ 石井と」

「うん、あった」

京^{けい}が合肥^{ハーフエイ}まで来たことを話す。あの夜、京とわたしは、ただ抱き合ったまま眠った。性欲は無く、ただ身体を触れていたかった。夜中に京がわたしの胸に顔を埋めてきた。わたしは京の頭を抱え込んだまま、夢の中を漂った。その額に唇を押し当てて、頭蓋^{ずがい}骨の中に巣くう記憶が安らかに静まることを、祈った。

わたしは子供を産んでいないけれど、子供を抱いているときは、こんな優しい気持ちになれるのかも知れないと思った。

「ありやあ…負けたわ…深刻やな、本気やな。仕事放り出さんようにせな」

…痛いところ見てるね松本さん、とわたしは言う。ビールの泡が消えてしまった。

「わたしの目、節穴とちやいますよ」

わたしは松本の目をじつと見入る。何度か身体を重ねた男の目が、こんなに遠いとは。そして澄んでいるとは。

言葉とはまるで真反対のことを伝えてくる目だ。瞬^{まばた}きしてくれないとコワイ、と感じると、瞬きしてくれて少し緩んだ。

「…松本さん、わたし初めてなのよ、こういうの…二十代三十代、男関係はあった。上手に付き合って、損はしなかった」

「もちろん、損したらあかん、女に損させたらあかん。とくに馬鹿な女に損させたら、あとがやつかいや」

話を下世話にする名人だ。

「…でもね、人生がらみにはならなかった」

「そろそろやろう、結婚せんままた来たいことは、下半身がらみか財布がらみか、どつちかやったけど、人生がらみとは違^{ちが}うてた」

「だけども…」

わたしは心底参っている。参りすぎてあつけらかんとした境地だ。

「難儀やなあ…いまごろになって、何に目覚めたんや」

何だろう、目覚めたのか、自分が変わったのか。

男への母性、という言葉が浮かび上がってくるが、そんなものが自分の中に、確かに在る自信はない。

「氏家さんの話が重かった…松本さんが意図した方向とは、真反対になってしまったね」

「ほんまや。あの氏家も死んだ社長夫人に惚れとったとは計算違いやった。熱こもつてたな、氏家。思い切り酔わせてしもうたしな」

「どっちもち終わる…だから終える、それしかない」

わたしのひと言に、松本は黙る。京との関係は終わる。終える。

「出来るんか」

「出来ないけど、それしかない。出来ても出来なくても、終わるのは確かだから」

どんなに馬鹿でも解る。続けるには、どちらかがどちらかを呑み込んで生活のカタチを作らなくてはならない。京は生活にもっとも不向きな男だし、わたしもこれまで、自分ひとりで自由にやってきた。

「そやな、どうやつても終わるな」

お金で…ギブアンドテイクで成り立つ関係なら、その取引が必要なうちは続けることが出来るけれど。

「…紅子さんが、死んだ夫人に似てる言うてたな。氏家の馬鹿が」

「つまり、かなりの美人でことよね」

とおどけたが、松本らしい突っ込みのひと言がない。代わりに真面目な顔で言う。

「…あのな、オモリが無いんや、紅子さんも石井もな。それが危険なんや」

「あるよ、わたし、仕事がおモリだもの」

「心中出来るんか？ 仕事と。オモリ言うんはな、一緒に死ねる対象のことや。重い

で、背負うて泳ぐんは。仕事なんぞは収入の手配さえつけば、いつでも投げ出せる。そんなもん、オモリでも何でもあれへん。石井は背中のおモリだけ死なせてしもうて、生き残ったんや」

わたしはムキになって言う。やるせなくて、腹が立つ。

「だったら松本さん、オモリあるの？」

「うん、ある。娘や」

まじまじと松本の顔を見た。照れているふうでもない。淡々とビールを口に運ぶ。

「娘がな、死ぬか生きるかの病気になったら、迷わずこの身体を差し出すで。アホな娘でもな、その保証があるから赤ん坊が人間にまで育つんや」

「だったら松本さん、どんな恋愛しても、離婚なんて考えられない？」

「そらわからん。そら別や。けど離婚してもそれは同じや。オモリは変わらん。石井はそのオモリを切ってきた男や。紅子さんも身軽や。羨ましいほど身軽や。いや、羨ましくないで。宇宙船の中の無重力いうんは、でんぐり返りも好き放題できてラクやけど、重力がかつとらんと骨スカスカになるんや」

わたしは俯く。何のためにここににいるのか忘れてしまう。何のためだったのか。京とは別れる。その決心を聞いて欲しかった。聞いてもらえれば、決心が本物になるような気がしたのだ。

「……紅子さん、石井と別れたら、わたしと暮らそうか？」

「はあ？」

「言うてみたかっただけや」

「人生のオモリはどうするのよ」

「勿論背負うてるで。その上に紅子さんを背負うて、にっちもさっちも行かんようになって、ドタつと死ぬ。ええな、それ」

だから孤独ではない、松本はそう言いたいのかな。その目を正視できない。

わたしはまだ、京を愛し足りない。まだ足りない。このままでは、どうしても別れられないと思う。松本の視線が重い。

午前中、数日の休みをとるための仕事を片付けた。マネージャーには、急に日本から客が来て、杭州に連れて行かなくてはならなくなつたと言つた。この時期だから、金融機関の人物を想像したはずだ。

趙にも同じ理由で、杭州へ行つてくれるように頼んだ。けれど趙は、これまで何度かわたしの挙動不審を見てきたので、それを信じているかどうかは判らない。夜の仕事で人と会うときは必ず待たせていたのに帰つて良いと言ひ、げんな顔にさせたことも何度がある。

合肥から戻つて、趙はこれまで以上に無口になり、柔らかな笑顔が増えた。

京との杭州行きを、趙にどう思われても構わない。居直りとも言えるけれど、この

小さい旅を、誰かに知っておいて欲しい気持ちもある。

長樂路チャルアルウと襄陽北路シャヤンベイルウの角で、京はバックバックを肩に掛けて待っていた。チェツクのコットンシャツに灰汁色あくのパンツ。素足に薄い茶のローファーを履いてわたしの車を待っている姿は、プラタナスの濃い緑の下ではつとなるほど美しい。若い芯が立っている。

「彼よ、あの角の」

わたしは趙に教える。趙は、はい老板ラオバンと実直に、感情を交えずに答える。

去年の夏、プラタナスの葉から降ってくる南洋蟬の鳴き声が、暑い大気をさらに暑くしていた夕方、京の住まいを探し訪ねた。そのときのことを趙が覚えているかどうか。

京が車に乗り込んできたとき、バックバックを受け取りながら言う。

「暑いね…逃げ場が無いほど暑いね」

仕事するときの声ではない。

趙は日本語が解らない。単語の幾つかは知っているかも知れないが、そんなことはどうでもいい。

京が趙に挨拶あいさつした。彼、日本語解らないから、とわたしは言う。

「仕事の方、大丈夫だった？」

「…翻訳の仕事は、ほぼ無くなりました。何もすることがない身です」

「それは大変。どん詰まりだね」

わたしは笑い、京もちよつと笑う。松本がわたしと京を、オモリが無い人生だと言つたのを思い出した。

「杭州は上海より、もつと暑いそうよ」

「地獄ですね」

京は軽々とした声で地獄と言つた。かすかに鳥肌が立つ。

陽炎が立つ道路を走る。わたしは京と手を繋ぐ。

杭州へは二度目だ。上海に来て間もないころ、まだ趙を雇う前のドライバーが運転して、一泊だけで来たけれど、あれは秋が深まった季節だった。

あの秋以来、遊ぶ余裕もなく働いた。働くことの方が、観光地巡りより面白かつたし、真剣になれた。杭州や蘇州に足を運んだのも、話の種に知っておくべきだと思つたからで、無心になつて楽しんだわけではない。

日本からの団体旅行でやってきた女性達が、子育てを終えた解放感と、旦那のいない気楽さから、まるで少女のようにはいしゃいで観光やグルメにお金を使う様子を、心底羨ましく思うのは、わたしには到底出来ないことだからだ。仕事だけしてきた女は、旦那への気遣いも無いかわりに、子供を育て上げた達成感も持てない。ましてや、他愛なくお喋りできる女友達もいない。

そのかわり、このしなやかで強い手がある…